

## 見えない障害と生きる

檜枝岐村立檜枝岐中学校 2年 森 心優

僕は、「トゥレット症候群」という発達障害と、学習障害を持っている。外見では分かりにくいため「見えない障害」とも言われる。

「トゥレット症候群」とは、自分の意思とは関係なく突然体が動き、奇声や咳払いなどといった症状が特徴だ。症状を抑えるのは難しく、無理に我慢をすると反動で悪化する。外出先では、好奇の目や心無い言葉を言われることもある。

ある日、定期通院する病院の待合室で、五、六歳くらいの男の子が、僕を見て言った。

「あのお兄ちゃん、気持ち悪い。」

その子のお母さんはこう言った。

「見ちゃダメ。こっちに来なさい。」

何度も聞いた台詞だ。小さい頃はそういう一言に一回一回傷ついて、外出を控えるようにしていた。今では慣れなのか、諦めなのか言われても仕方がないと割り切れるようになった。しかし、男の子の興味は、僕から離れない。お母さんにしつこく聞いている。このままでは男の子が叱られる、僕のせいで叱られる姿は見たくない。だから僕は、男の子に伝えた。

「腕が勝手に動いたり、変な声が出ちゃう病気なんだ。病気を直しに病院に来たんだよ。」

と、男の子は、僕の腕を触りながら、注射をしに来たと教えてくれた。泣かないで頑張れよと言うと、お兄ちゃんも頑張ってるねと励まされた。こんなやり取りをもう何十回してきただろう。僕もだいぶ対応に慣れてきた。男の子との会話は続き、僕の鞆のヘルプマークの話になった。ヘルプマークとは、外見からは分からなくても、援助や配慮を必要としている人が、周囲の人に配慮を必要としていることを知らせるマークで、鞆等に吊るしていることが多い。そのマークには伝えたい情報を記入することができ、僕も持っている。

「もしこのマークをつけている人が困っていたら、何かお手伝いできることはありますかって聞いてね。」

男の子にそう伝えたが、僕のヘルプマークの記入欄はまだ空欄のまま。何と書いたら健常者の人に伝わるのか、僕にはわからない。でも、大きな声が出てしまい、人を驚かせ、不快にさせてしまいトラブルになることもあるかもしれない。僕にとってヘルプマ

ークは障害を持っていることを周囲に知らせ、障害者が嫌な人は僕に近づかないでね、そういうサインを送るためのアイテムなのかもしれない。

男の子は僕の隣で遊びはじめた。僕の隣には基本誰も座らない。座っても逃げていく人もいる。これは結構ダメージを受ける。僕は障害から逃げることはできない。でも健常者の人は逃げるができる、うらやましいとすら思ったこともある。家族以外の人が僕の隣に座るのはいつぶりだろう。男の子は、僕が大きな声を出しても、体が動いても、動じることなく、僕とにこにこしながら話をしていた。最初は僕の事を気持ち悪いと言っていた男の子が、話をしていくうちに、そんな気持ちはなくなっていたようにみえた。偏見を知らない子供たちは障害者と接することで自然に多様性を理解し、障害がある人達のサポートをどうすればいいのかを自発的に体得していくのだと僕は感じた。逆に僕たち障害者も将来生きていくために健常者との接し方を知らなければならぬと思った。すると、その子のお母さんは子供の手をぐっと引いた。

「こっちに来なさい。」

明らかに怒っている顔だ。僕は、残念な気持ちになった。お母さんが怒っていた本当の理由は分からないが、あまりいい印象は受けなかった。でも、自分の知らない世界は誰だって怖い。頭では良くないことと分かっているけど、自分の普通からはみでた存在に恐怖や嫌悪感を抱いてしまう気持ちも分かる。僕のことを知らない人が、好奇の目で僕を見ながら笑い、心無い言葉を平気で浴びせてくる。「好きで障害者になったわけじゃない。」何度も何度も叫びだしそうになった。でも、僕のことをよく知らない人に、また知ろうともしない人に、真つすぐ向き合っても無意味なことだと分かっている。頭のおかしいやつそう思われるだけだ。僕も健常者だったら良かったと思ったこともある。いつか自分の病気の治療法が見つかり、健常者と変わらない暮らしができるかもと期待したこともあった。でも、障害があることで、できないことも多いけど、悪いことばかりじゃない、人の優しさやたくさんの方のサポートが、僕に生きる勇気と自信、努力することの大切さを教えてくれた。

障害者が住みやすい社会は、誰もが住みやすい社会だと僕は思う。健常者だけが努力するのではなく、必要なサポートさえ受けられれば、僕のような障害があつたとしても社会の一員として活躍することが可能だと思う。

僕はこれからも見えない障害と共に生きる。